

琵琶湖・北陸の旅 2019



2019年4月

旅のチカラ研究所 植木圭二

早春の関西と北陸にひとり気ままな旅に行ってきた。移動手段の多くは自動車を使用したけど、隠れたテーマは「淡水クルーズ」だ。湖と川を楽しむ旅、そして新たな発見もあった。

第一章 琵琶湖

■期待と落胆、偶然と感動

ありがたい話で、先日行ったクルーズの旅行記で私が使った「期待と落胆、偶然と感動」という言葉に意外に反響があった。

その言葉にこめた意味は、旅行先で名所に行くにあたってインターネットやテレビの事前情報によって期待し過ぎると落胆するが、同じようなものでも事前情報なく成り行きで偶然見たものに対しては感動が大きいということだ。(詳しくは「豪華客船の旅 2019」参照)

今回は所用のために妻と一緒に関西に来た。そして私ひとりが車で神奈川に帰ることになり、偶然と感動を求めて成り行きで行く旅をしたくなった。

気ままな車のひとり旅、何処に行こうか。それを考えるところからこの旅は始まった。

■雄琴温泉

昨晩は関西在住のクルーズ仲間たちと飲んでいたが、あるメンバーから明日行くところが決まらなければ琵琶湖の畔にある雄琴温泉に行こうと誘われた。昔は風俗店が多い温泉街だったが今は全く変わってしまい、良いところだと言う。成り行きの旅にはピッタリだと思い、二つ返事でOKした。

そして本日、雄琴温泉の日帰り入浴施設「あがりゃんせ」に彼と一緒に来ている。ここは大きな施設でいろいろな風呂がそろっており、中でも私が気に入ったのは琵琶湖に面している露天風呂だ。琵琶湖の湖面が自分の入っている湯船と同じくらいの高さに見えて、琵琶湖に入浴しているような気持ちにさせてくれる。やや温めの泉温が気持ちいい。

この施設の特徴として演芸場があり、今月は「劇団しらさぎ」の舞台公演をしている。同行の彼の勧めもあってその公演見ることになるが、これが面白い。

田舎の温泉街でやるような時代劇と喜劇が混ざったような演劇だが、さすが関西のノリでなかなかいい。熱狂的なファンもいるようで、黄色い声援もおヒネリも飛んでくる。年齢も時代も忘れさせてくれる。終わってみれば、何か得したような気分になっている。これも偶然と感動というものか。

お気に入りになった露天風呂に再び浸かりながら琵琶湖の湖面を眺めて、この後どうしようかと考える。時間はたっぷりある。

以前、私が行った過去の旅を調べたことがあったが、その時に分かったことは意外に「島」に行っていないことに気が付いていた。

日本には島がいくつあるのか。

日本の島を紹介した本で読んだことがあるが、総数は6000くらい。人が住んでいる島はおおよそ400島くらいだと思い出した。統計の取り方、特に島の大きさによって総数には結構幅があるらしい。

温泉に浸かりながら数えてみると私が行った島の数は国内で40島くらいだ。私は島の持っている独特な雰囲気が好きで、もっと行きたいと思っているのにも関わらず、ましてや旅のチカラ研究所としては少ない。

そして私は琵琶湖に島があることを思い出した。さらに淡水湖にある島は世界的にも珍しい。今回は島と淡水湖の旅をしようと何となく見えてきた。

■沖島

ビジネスホテルに泊まり、近江八幡市にある沖島へ向かう。沖島は琵琶湖で一番大きな島で唯一人が住んでいる島だ。観光ポスターには「海なし県の離島」と書いてあった。

前の晩に渡船の運航時間を調べていたが、うろ覚えで向かったのが失敗で、船着き場に着いたら船は出たばかりだ。待合室にあった運航時刻表では、次は何と2時間後になっている。

1時間ほど散歩して再び船着き場にきたが、何となく雰囲気が違う。というのは船から降りてきたらしい人がいる。船着き場の桟橋に架かっている別の運航時刻表を見ると待合室のものと違っている。こちらの時刻表では5分くらい前に出た船がある。

待合室の時刻表は古いのだろう、何となく色あせている。地元の人たちは船の時間は暗記しており時刻表など気にしないのだろう。

ここは観光地ではない、生活の島だと感じる。

痛恨の2時間待ちの末に、ようやく渡船に乗った。島民に混じって釣り客の姿もあり、観光客もチラホラいる。約10分間の湖水クルーズを終えて島の船着き場に着く。漁業協同組合の倉庫のような建物があって、そこでちょっとした土産物を買うことや飲食もできる。どうやらこの島で唯一の観光客向けの施設らしい。



民家は船着き場の近くの平地に集中している。いや、平らな場所はほんの一部なので集中するしかない。さらに島内には信号機が無い、そして自動車も無い。

島は田舎の漁村という感じなのだが、当たり前の話だが潮の香りはしない。

まずは今回の旅の安全と成功を祈願するために高台にある神社に参拝する。そして船着き場近くの沖島資料館に立ち寄る。資料館といっても普通の民家で、ここで色々な情報を仕入れる。

沖島の人口はおよそ 200 人。東西 2.5km、南北 1km、周囲は 6.8km あるが、ほとんどが山なので一周できない。周囲 6.8km というのは多少凸凹しているので大きき的には一周 5km の皇居と同じくらいだ。最高標高 225m というのだが、琵琶湖の湖面がすでに標高 84m なので、湖面からは 141m ということになる。

島で一番大きい建物は小学校で、とりあえずそこを目指して島内を散策することにした。

地図で見ると湖岸の道路から一本入った道がメインストリートらしいので、そこを通り抜けることにしたが、そこは狭い路地だ。人間 2 人がすれ違うには問題ないが、3 人は無理という広さだ。両側には民家が連なっており生活感たっぷりの道で住民たちが行き交うという意味ではメインストリートかも知れない。

そこを抜けると小学校がある。立派な 2 階建ての校舎の前に校庭があつて、多分この校庭が島で一番広い平地だろう。資料館でみた写真ではこの校庭で島民の運動会が開かれていた。

小学校を過ぎても散策を続けていくが、民家がめっきり減って畑が多くなる。畑といっても土地がないので猫の額ほどの家庭菜園のようなものだ。恐らくはこの島ではこの畑の野菜と琵琶湖の魚だけが自給自足の食料なのだろう。

さらに歩くと道はさらに狭くなり湖面沿いに弁財天までずっと続いている。弁財天の鳥居のところで道が終わってその先はない。船着き場からの散策は片道 20 分程で終わってしまった。

この島は観光するところは何もない。しかし島の生活を肌で感じるができる味わいある島だ。

■竹生島

琵琶湖の北部に沖島の次に大きい竹生島がある。豊臣秀吉が初めて城持ち大名になったことで有名な長浜城の近くの港から出ているクルーズ船に乗って 30 分ほどで到着する。

島は周囲 2km、標高 197m、つまり湖面からは 113m になる。島全体が花こう岩の一枚岩からなり、切り立った岩壁で囲まれている。そんな島だから人が暮らすというよりも信仰の島として存在してきた。

神社と寺と土産物店があるが、関係者はいずれも島外から通っているので夜間は無人島になる。

私は幼い頃からの手塚治虫の大ファンで、その代表作「火の鳥」の中の短編「異形編」がこの島を舞台にしていると信じて疑っていない。

ストーリーは、主人公が都近くの島に渡り寺の尼を殺すが、不思議な力によって島から脱出できない。仕方なく尼になりすまし結局 30 年間過ごす。そしてまた別の人間が島にやって来て殺され、その殺した人間も同じように 30 年を過ごし殺されることを繰り返すという仏教の教えとはまた違う形の輪廻転生になっている。

その都近くの島が琵琶湖に浮かぶ竹生島ということで、私にとって 30 年、いやそれ以上も思い続けてきた神秘の島である。



そんな舞台になるような島なので寺社仏閣は時代に応じて様々そろっている。

奈良時代に行基上人が四天王像を安置し竹生島信仰が始まる。建造物はいくつもあるが大きく分ければ竹生島神社と宝巖寺になる。

竹生島神社は日本三大弁財天のひとつだ、あとの2つは湘南の江の島と安芸の宮島でどちらも有名な島の神社だ。

浅井長政の父がこの島に幽閉されたことや、織田信長が参詣したことが記録されている。宝巖寺は豊臣秀吉のゆかりの寺で、唐門は豊臣秀吉の大坂城の唯一現存する遺構だ。

一体この島の信仰とは、何なのか。そういう目で見て回らないと全部が一緒になってしまう。いや、全部一緒がこの狭い島の本当の姿なのかもしれない。それは過去の日本の宗教政策である神仏習合と神仏分離の結果がもたらしたものだ。

日本という国は聖徳太子の昔から仏教を保護してきた。換言すれば活用してきた。仏教もそれによって日本全土に広まった。さらに神仏習合を進め、神道と仏教が融合して一つの信仰体系をつくっていく。神様仏様という言葉はこんなことから生まれたのだろう。

しかし明治維新で一変してそれまでの神仏習合ではなく、天皇の力、つまり神道を重視するようになった。神仏分離令が出され、神社と寺は厳密に分けるよう強要される。

この竹生島も神社と寺が同居して一体になっていたのだろうが、無理やりに分けた結果が今の姿だ。それでも分離しきれていない部分が多々ある。そんなことを意識して見て回ると面白い。

第二章 北陸3県

■幸福度ランキング

朝、ホテルの従業員に「福井は良いところですね。」と私が話しかけると、彼からは「北陸3県で一番遅れていますよ。新幹線もまだ通っていないし・・・」という言葉が返ってきた。

確かに新幹線はないが、しかしそんなものがなくても2018年の日本の都道府県で幸福度のランキングでは福井がトップ、それも3回連続というからダントツだ。2位は東京で、北陸3県と言われる富山、石川もベスト5に名を連ねている。

このランキングは所得などの基本指標と仕事・教育・健康・文化・生活など計70項目の指標で評価しており、イメージというよりも客観的な評価結果と言っていいたい。

私は北陸3県の幸福度が高い理由を知りたいと常々思っていた。数字をひもといて分析すればそれなりの理由は分かるだろうが、それは机上の空論だろう。

現地を歩いて肌で感じたいというのが今回の北陸3県巡りのひとつの目的にしたい。

■ソースカツ丼発祥の店

自称ソースカツ丼評論家を名乗る私にとって福井のソースカツ丼、それもヨーロッパ軒は特別な店である。

ソースカツ丼の起源については諸説あるが、東京にあったヨーロッパ軒の店主がドイツでの料理修行を終え 1913 年（大正 2 年）に料理発表会でソースカツ丼を発表し、その店が関東大震災で被災し福井に移ったという。（詳しくは旅行記「極寒キャンプ 2017」、「日本一周鉄旅 2018」、「極寒キャンプ 2019」参照）

一方、卵でとじる一般的なカツ丼の方は、明治 30 年代後半には甲府のそばの老舗「奥村本店」で提供されていたと 1995 年 9 月付けの地元の山梨日日新聞で書いている。明治 30 年代だとソースカツ丼の発表の 10 年くらい前になる。

しかし私はこの新聞記事に疑問をもっている。

というのは、皿に盛ったトンカツをほとんどそのまま丼ぶりに乗せればソースカツ丼になるが、トンカツを醤油ベースの割り下と一緒に卵でとじるというのは一般的なカツ丼の方が西洋と日本の食文化の融合であって、工夫があり進化している。だから卵とじのカツ丼の方が後に出来たと考えるのが普通だろう。それはまあ、いいか。

実はヨーロッパ軒には昨年も訪れており総本店が休業だったので分店に立ち寄った。しかし総本店にどうしても訪れたいので今回は日程を合わせてやって来た。

総本店のカツ丼も薄い豚のもも肉を揚げ、トンカツにしてウスターソースにくぐらせたものでカツは柔らかく食べやすい。これはドイツやオーストリアのカツレツ風の料理「シュニツェル」からヒントを得たと店の品書きにも書いてある。私もオーストリアで食べたことがあるが、今思い出すと、カツの薄さ具合は酷似している。



ソースの絶妙な味は各店舗で異なるということを知っていたが確かに少し違う。少し辛みのあるウスターソースに独特な味が付いている。独特な味というのはシナモンやニッキのような香りが微妙についている上品な味で、さすがに総本店だ。

ただ肉は少し薄すぎるような気がする。薄い分だけ柔らかく食べやすいが、私の好みはもう少し厚みがあった方がよい。

それにしても隣のテーブルで食べていたカップルに腹が立つ。

30代の夫婦だろうか。夫はスポーツ新聞を見ながら、妻はテレビを見ながら食べている。テレビを見るために彼女は体を90度以上も回転させている。そんな2人なので当然会話もしていない。「ながら族」とはよく言ったものだ。普通は食べる方が主で見る方が従なのにこの2人は見る方が主になっている。

ここはその辺の街の食堂ではない、ソースカツ丼の聖地だ。いくら何でもそれは無いだろう。

博多ラーメンの有名店「一蘭」では食事に集中するように選挙の投票所のようについ立てスタイルにして、ひとりずつ分けている。それがラーメンにこだわった店主の結論だという。

そこまでやる必要はないだろうが、この2人はひどすぎる。料理人、いやソースカツ丼に失礼だ。後味の悪い夕食になった。

■木場潟

石川県小松市の国道8号線を車で走っていると木場潟公園という、木場潟という大きな湖を持つ公園を見つける。早速行ってみると実に広い公園で、思わず「この公園は、一体何だ！」と叫んでしまう。

木場潟公園は加賀平野の中心部にあって、周囲6.4kmの長方形の木場潟という湖の外周を取り巻くように北、南、西、中央園地と4つの園地があり、各園地を結ぶウォーキング道路が整備されている。

北、南、西の各園地は100台以上の車が置おける駐車場があり、普通ならばこれら一つひとつが独立した公園でもおかしくない大きさだ。中央園地は更にその10倍以上ある。全てが芝に覆われて、とんでもなく広い。

この広さを肌で感じたく、私のアル中（歩き中毒）の虫が騒ぎ始めて、木場潟一周6.4kmのウォーキング道路を歩くことにする。一周6.4kmは、最近どこかで近い数字を見たことがある。琵琶湖の沖島の外周が6.8kmだった。

皇居一周のコースは約5kmだから、この湖は皇居がそっくり収まることになる。

皇居は歩いて約1時間なので、ここはもう少しかかるが、何やらとても楽しくなってくる。ウォーキング以外にもランニングやサイクリングを楽しむ地元の人たちも多い。

南東には白山連峰を臨み、反対側は加賀平野が広がって景色抜群のロケーションになっている。桜の木が1300本は植えてあるというから、春の花見は凄くなりそうだ。

湖はカヌーのナショナルチームの練習所にもなっており、カヌー用のブイがロープで張られている。国際大会のカヌー競技は2000mが必要なので、世界大会もここで開かれるという。

中央園地には芝生のサッカーコートが2面あり、サッカーの試合をやっている。パークゴルフも盛んで中高年の人たちが何十人いるだろうか、盛り上がっている。こども広場のようなものもあって小さい子供を連れた若い母親や老夫婦もいる。これらは全てが芝生だから凄い。

管理棟のようなところではトイレやレストハウス、パークゴルフの受付をしている。

とにかく、広くて素晴らしい。こんな公園を私は見たことがない。「偶然と感動」とはこういうことだったのかと、改めて自分の理論？に感心してしまう。

そして、これも北陸3県が幸福度ランク上位になる理由のひとつなのだろう



■満足できる観光名所

小松市には、世界の名車や日本の名車に出会える「日本自動車博物館」というのがあり、面白そうなので立ち寄ってみた。

この博物館は個人のコレクションというが、何と500台もの自動車が3階建ての大きく立派な建物に展示されている。

トヨタや日産といったメーカーの展示場ではないので、国内外のメーカー各社の車が展示されている。名車以外に、昔乗りたかった憧れの車、自分や友人が乗っていた車もあって、興奮と懐かしさで時間を忘れるほどだ。

これも「偶然と感動」だろうか。私は興奮のあまり写真を44枚も撮ってしまった。

やはり小松市に那谷寺という古い由緒正しい寺があり立ち寄る。しかし何となく見覚えがある。その昔の紅葉の季節に両親と子供、親戚も連れて来たことを思い出した。

寺は717年から始まった。観音霊場三十三カ所はすべてこの山に凝縮されるとして、西国三十三観音の一番「那智」と三十三番「谷汲」から一字ずつ取り「那谷寺」としたという。

南北朝時代に戦乱に巻き込まれ荒廃し、前田利家の子の前田利常が再建した。松尾芭蕉も立ち寄って句を詠んだので芭蕉の句碑もある。

建物はもちろん、岩を掘ったお堂、庭園も素晴らしい。

■偶然見つけ2つの宿

粟津温泉で偶然にもAZホテルを見つける。私が一度泊ってみたいと思っていたビジネスホテルで、九州を中心に西日本エリアに展開するホテルチェーンで残念ながら東日本には無い。

現在78店舗で、東横インの292店舗には及ばないが、とにかく安いことが特徴だ。東横インは駅前などに店舗しているのに対してAZは郊外型だ。つまり自動車利用の観光客や、ビジネス客といっても工事業者などがターゲットになっている。

朝食付き 4800 円、朝夕食付でも 5800 円というから信じられない価格だ。部屋は新しく綺麗かつ清潔だ。

1000 円相当の夕食はメイン料理以外の漬物や小鉢に入るような簡単な料理は食べ放題になっている。アルコール飲み放題もプラス 1000 円、とにかくコストパフォーマンス抜群だ。

そして粟津温泉では、もうひとつ気になるホテルを見つける。早く着いたので日帰り入浴できる施設を AZ ホテルのフロントのお姉さんに聞いたら「湯快リゾート栗津グランドホテル」を紹介してくれた。

行ってみると私がよく行くホテルグループと酷似している。それは経営危機に陥ったホテルや旅館を買い取り独自のノウハウで再生させて低価格で提供するというビジネスモデルのホテルグループのことで、「伊東園」、「おおりり」、「大江戸温泉物語」といったところだ。

この「湯快リゾート」は現在 29 ホテルを西日本中心に展開しており、残念ながら東日本にはない。AZ ホテル発見に次ぐ快挙かもしれない。やはり偶然と感動だろうか。

7500 円で食べ放題で、飲み放題はプラス 1500 円というから 1 万円であっさり楽しめる。

■船でしか行けない秘湯

淡水クルーズという言葉から、船で温泉旅館に渡るというシーンが頭に浮かんできた。そういえばそんな温泉旅館があった。

「船でしか行けない秘湯」というキャッチコピーで有名な「大牧温泉」は富山県の庄川の畔にある。よくテレビで紹介されている有名な旅館だ。

一昨日の夜、宿に電話を掛けたが、ひとりの宿泊は断っているという。船でしか行けないということでお客の健康上の問題などで緊急事態が発生した対応が難しいのだろう。

では、日帰り入浴はあるかと聞くと、明日はいっぱいだという。そんな訳で 1 日待って本日になったのだが、日帰り入浴がいっぱいというのはそんなに人気があるのかと驚いてしまった。

船は、ゆっくりと庄川の上流に向けて進んで行く。川の水は青というよりも緑色をしている。ここはダム湖なので元々は V 字谷の溪谷だったのである。左右の山からも小さな滝が落ちている。そんな光景を見ながら 30 分で大牧温泉に到着する。

専用の船着き場には女中さんが迎えに来てくれている。船着き場から旅館までは歩いて少しだが、迎えに来てくれる気持ちが嬉しい。

館内に入るとロビーには囲炉裏が切っただけである。囲炉裏の向こうには窓があって窓の外は庄川の緑色の川面が見える。女中さんに水の色を理由を聞くと、プランクトンだという。

建物は安普請ではなくしっかりと重厚な造りをしている。重厚だが古さは感じさせない、綺麗に使っている。これだけの木材を船で運んで旅館を建てるのは大変だったろう。

館内には有名人の色紙や写真がたくさん飾ってある。この宿はその立地条件から温泉紹介の旅番組や 2 時間のサスペンスドラマの撮影に数多く使われており、特異な人気宿だ。

私もそれらの番組を見ていたので、船で温泉旅館に着くというシーンが浮かんできた。



旅館に着いたのが12時頃なのでまずは昼食が出てくる。食事付とはいえ日帰り入浴で7000円もとるので豪華な昼食なのは理解できるが、昼間からこの豪華さはクルーズ船に乗っているようだ。いや、淡水クルーズで来たことを忘れていた。

風呂は男女別々に3つあり、庄川に面したテラス風呂、宿の裏山の中腹にある露天風呂、そして内湯の岩風呂だ。湧出温度58℃だが、湯船はやや温めの適温になっている。PH8.1で弱い硫黄臭がする。3つの風呂全てに入ったが、どの風呂も充分満足できるレベルである。

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。温泉に行った時に組織される勝手気ままな委員会で、メンバーはそこに同行した人になる。

今回は私一人の評価になるが、基本5段階の主観評価で大牧温泉は、泉質4、風呂5、料理4.5、コスパ3、秘湯度5、サービス4.5、建物・部屋5で総合点は4.43になった。過去の他のデータと比較するとこの値はかなり高い。



船は1日4往復しかないので、帰りの時間は最初から15時と指定されており、3時間の日帰り入浴は終了するが、ここは是非泊まりに来たいという気持ちにさせてくれた。

「船でしか行けない秘湯」か。実に的を射たキャチコピーだ。

■ 駒ヶ根のソースかつ丼

ソースカツ丼が有名な地域は福井、群馬、福島などだが、自称ソースカツ丼評論家としては帰り道を少し遠回りしてもう一か所の有名な場所に立ち寄ることにした。長野の駒ヶ根だ。

事前に調べた結果、駒ヶ根で最初にソースカツ丼を出したのは食堂「きらく」だという。駒ヶ根のビジネスホテルに宿をとり、夕食に食べに行く。

「きらく」は1928年（昭和3年）にこの地で創業して、店主がカツライスにヒントを得て独自に工夫したソースに浸しソースかつ丼を作ったと品書きの裏に書いてある。

私が思うに普通に考えればカツライスをご飯の入った丼ぶりにそのまま乗せれば、ソースかつ丼はできてしまうので、発想の転換もなく発明的な要素はない。たまたまヨーロッパ軒の発表の方が早くなったが、テレビもインターネットも無い時代なので意図的に真似をしたのではないだろう。

さて、本題のソースかつ丼はご飯の上に比較的多めの細切りキャベツを乗せて、ウスターソースに浸した厚めのロース肉のカツを乗せたものだ。ソースは甘くもなく、辛くもなく、あっさりとしている。絶賛するほどではないが普通に美味しい。

他の地方のソースカツ丼と比べると、キャベツの存在感が大きい。

そしてもうひとつの違いは「ソースカツ丼」ではなく「ソースかつ丼」と書いている。これは駒ヶ根では共通している。

翌日、宿を遅くチェックアウトして別の人気店「明治亭」に立ち寄る。11時の開店直後に入店したが、間もなく満席になるからその人気ぶりが分かる。

こちらのソースかつ丼もキャベツが多く、しかもシャキシャキしている。朝食を食べてあまり時間が経っていないのでご飯少なめを注文したが、キャベツの量によって大盛に見える。



昨日の「きらく」と比較すると、ロース肉は同じだがソースはウスターソースがベースだがやや濃厚だ。ソースにはこだわりがあるようで、独自に開発して自社工場で大規模生産している。

キャベツのシャキシャキ感とソースの味は私好みで、人気の理由が分かる。

写真は「明治亭」のソースかつ丼である。

気ままな一人旅はこのソースかつ丼を食して終わりになる。

■旅の記録

2019年3月23日(土)～27日(水)のひとり気ままな自動車旅行の総費用は約8万円だった。宿泊地と費用詳細は以下に示す。

・宿泊費 22015円

1 泊目 東横イン彦根駅	5605円	(朝食付き)
2 泊目 東横イン福井駅前店	4800円	(朝食付き)
3 泊目 AZ ホテル石川栗津店	5810円	(2食付き)
4 泊目 駒ヶ根プレモントホテル	5800円	(朝食付き)

・食費、入場料など 約19329円

ソースかつ丼 ヨーロッパ軒総本店	1150円	
ソースかつ丼 駒ヶ根きらく	980円	
ソースかつ丼 駒ヶ根明治亭	1393円	
トマトカレー 道の駅こまつ木場潟	560円	
餃子の王将彦根店	1726円	
AZ ホテル飲み放題追加料金	1000円	
大牧温泉旅館 日帰り入浴	8520円	(ビール含む)
入館料、拝観料、入場料など	約2000円	(日本自動車博物館、那谷寺、竹生島他)
コーヒー、ビール、つまみなど	約2000円	

・交通費 約39160円

沖島渡船 往復	1000円	
竹生島 長浜～竹生島往復	3070円	
庄川クルーズ 大牧温泉往復	2800円	
高速道路 厚木～茨木	7170円	(休日割引 新東名、伊勢湾岸、新名神)
高速道路 長浜～相模原	14120円	(名神、北陸道、東海北陸、中央道)
ガソリン代	約11000円	(走行距離1423km)